

平成 19 年度多可町生活創造大学「情報文化科」提言

－地域発見！ふるさとに多くの可能性を見つけよう－

情報文化科では、「－地域発見！ふるさとに多くの可能性を見つけよう－」をテーマとして、多可町で魅力ある活動をされている方の話や、いにしえの昔話をお聞きしたり、実際に見てまわりました。また、学外研修では、情報の最先端である大阪のパナソニックセンターや歴史的価値のある「鯖街道」を観光拠点とし、まちづくりに活用されている福井県若狭・小浜を訪ねたりしながら、今年度の学習を進めてきました。

この一年間の学習を通して、多可町が魅力あるまちに発展していくために以下の提言をいたします。

1 大阪のパナソニックセンターへの学外研修では、情報機器やユビキタスネットワーク社会など最先端の機器や考え方を、ご教授いただきました。

多可町も現在平成 21 年度から完全実施となる地上デジタル放送の受信準備やケーブルテレビを計画が策定中であると思います。ケーブルテレビについては、自主放送や自主放送のプログラムのあり方、撮影ボランティアの採用やビデオレター的なものの活用、町内の趣味を持つ人たちが中心となるグループに取材や編集作業の委託等ご検討いただき、極力低料金で住民が利用できるようにしていただきたい。

2 第 7 回の講座で「おしゃれで楽しい粋な日本文化」と題して、美しく包むふろしきの技を学びました。

ふろしきは、日本古来の伝統的な包装用具であり、文化です。単純な方形の布一枚のことですが、包装する機能性だけでなく、包んだものに気品をも感じさせます。季節感を醸し出すため、色柄・模様・材質を選びながら包み方を考えることで、一枚のふろしきが商品を“特別な贈り物”に変えてしまいます。包装紙にはとても期待できないところです。

昨今、CO₂問題やごみ問題からエコバックの普及が話題を呼んでいますが、ただ単にエコバックの作成では問題は解決しません。地域の特産品綿織物を活用した『ふろしき』こそ一番の解決策だと思います。ちょっと大き目のふろしきを活用することで多方面の用途が生まれるのはすでに承知のことですが、うまく裁断、縫製することでより多くの活用方法が生まれてきます。

ふろしきの包み方で変わる包装の方法と、補助具を加えて使いやすくする方法、持ち手の紐を縫い付けて『布バック』として使う方法など、播州織の産地として普及させてはどうでしょうか。

3 第1回講座では、「里山を生かしたまちづくり」と題して北はりま森林組合の橋詰氏から山と森林の現況についてお聞きしました。

私たちが生活するために一番大切な水や空気をもたらしてくれる身近な森林（里山）を荒廃から守り育てることの大切さを認識いたしました。

森林の保全のためには、森林作業に従事する若い技術者育成に対する支援が必要でないでしょうか。また、間伐材の活用方法として、間伐材をチップにし、燃料に活用するバイオマスタウン構想を進めておられますが、CO₂削減効果のためにも積極的に推進していただきたい。

平成 19 年度多可町生活創造大学「情報文化部」提案書

－地域発見！ふるさとに多くの可能性を見つけよう－ ・・・・・ 地域開発は民間の活力で！・・・・・

1 多可町の産業には様々なものがあり、それらの持つ特徴を把握し、その能力を活用することが大切だと考えます。地域の活力は、地域内の産業力であり、町が行政を執行するとき、まず町内業者を活用することが今日、最も重要なことと考えます。

町内には多くの公的施設がありますが、民間と競合するものもありながらも、多くがその地域に管理を委嘱する場合が多くなっており、地域にとっても重要な施設となっております。しかしながら、それらを生かすために地域住民の役職に任せるだけでなく、民間の業者をも活用することも考えに入れていただきたい。

外部の大きな業者のはうが効率的な場合もありますが、特定指名入札の形にもあるとおり、町内業者に能力が不足している場合でも可能な業者と連携し、地域と組ませることが町内業者に高度な能力を体験させられる面と結果として、事業後の継続的な責任ある維持管理が求められる面からも実施していただきたい。

また、このことで町内の資金が少しでも町内を巡り、地域社会の振興に大きな助けになるだけでなく、より広域の中で業種別の実力をつけることになり、公共事業一辺倒の業態をつくらず、安定的な雇用を作り出す基となるでしょう。

2 平成 21 年度から完全実施となる地上デジタル放送の受信準備については、民間業者の光ケーブルを活用することで解決を見ようとしているが、自主放送のあり方も考え直して欲しい。町内の自主放送のプログラムは、地域のまとまりを得るために、ひとつ的方法かもしれないが、その経費を考えると今の状態で良いかを考えなければならない。

地域の特性を出しながら行われる地域のまつりや行事、議会や行政運営など、知らせることが良いようにいわれるが、ここまで経費をかける必要があるのか疑問である。その多くは後の新聞記事や報告書、広報などで知ることで十分なものもある。今一度、他の利用方法とともに、その活用と経費のかけ方を考え直す必要を感じる。

また、通常の町内の生活ニュースは、撮影ボランティアを募集するのが良いと思う。説明原稿と 3 分以下の範囲で投稿を募ることで、趣味を持つ人たちのやりがいにもつながると思います。また、ビデオレター的なものを採用することで、公共放送だけでなく個人的なものも活用できれば、町民の顔が直接茶の間に届くでしょう。町内の写真屋さんや趣味を持つ人たちが中心のグループに自主管理と編集作業も委嘱すれば良い放送ができると思う。

3 バイオマстаун構想を進めつつある多可町は、その地元が持つ力を最大限に利用すべきである。加西市を含めた森林が加盟する北播磨森林組合はまもなく西脇市や加東市もその範囲に含めるでしょう。その本拠があるわが多可町が木質バイオマスの活用による環境対策を推進するには絶好の立場にあります。

短期的には、「チップ・薪のストーブや暖炉」の設計を募集し地元金属加工業者を中心に手づくり可能な作業でストーブを造る。その製作グループを中心に販売をし、シニアクラスの仕事に振り向けることで壮年組みの活用ができます。また、それと共に木質チップを活用するだけでなく、燃料としての雑木が珍重され、里山の健全な維持が図れます。

長期的には、木質セルロースを分子分解し、産業資源化できるプラントの建設を行うことです。この先いくら間伐をしながらCO₂の削減効果を生む森林の手入れをするだけでは地域の8割の森林を有効に活用できません。三重大学の研究で木質材料から原油材料の化学製品の95%が創り出すことが可能になり、すでに北海道と徳島ではトヨタ自動車などとの契約で製造プラントが建設中です。無論木質プラスチックからエタノール燃料までの製造が可能で、今ならNEDOの1/2補助も含め政府系の補助と企業系の出資を受けることができます。電機も副産物として造れます。多可町が産業拠点になり、雇用以上のものが得られます。但馬や丹波、西播磨などの林業地域に遅れを取らなければ、逆に周辺を供給地として活用できます。神戸製鋼グループなどの企業の力とともに地位を生かした産業の創造こそ地球規模のまちづくりです。

4 昨今、CO問題やごみ問題からエコバックの普及が話題を呼んでいますが、ただ単にエコバックの作成では問題は解決しません。地域の綿織物を活用した『風呂敷』こそ一番の解決策だと思います。ちょっと大き目の風呂敷を活用することで多方面の用途が生まれるのはすでに承知のことありますが、うまく裁断、縫製することでより多くの活用方法が生まれてきます。

風呂敷の包み方で変わることと、補助具を加えて使いやすくする方法、持ち手の紐を縫い付けて『布バック』として使う方法など、播州織の産地として普及させてはどうでしょうか。